

---

# ワールド “ Mazzo Di Fiori - マッツォ ディ フィオーレ ” ~ 裂と尋の冒険記 ~

銅太陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ギルド“Mazzo Di Fiori-Mattso デイ  
フィオーレ”〈裂と尋の冒険記〉

### 【Nコード】

N3765X

### 【作者名】

銅太陽

### 【あらすじ】

現在星暦3012年。遙か昔に、この地球は二つにわかれた（・・・）

片方の地球は聖なるみちを、もう片方の道は星なる道をそれぞれ歩み始めた。

その結果、本来交わることのない平行世界…パラレルワールドとそれぞれの地球が干渉し、その世界の特殊な部分…つまりは過去では絶対にありえなかったことを吸収していった。

それぞれの地球の住民は、初めこそ戸惑いがあったが次第になじんでいった。

そんな世界の住人であり、変わってしまった世界の象徴というべき異能者である二人の少年の冒険記。

## 今と過去

現在星暦3012年。遙か昔に、この地球は二つにわかれた。片方の地球は聖なるみちを、もう片方の道は星なる道をそれぞれ歩み始めた。

その結果、本来交わることのない平行世界：パラレルワールドとそれぞれの地球が干渉し、その世界の特殊な部分。つまりは過去では絶対にありえなかったことを吸収していった。

それぞれの地球の住民は、初めこそ戸惑いがあつたが次第になじんでいった。

ここは港町メセボ。

この町に住んでいるのは昔風にいうと、異能者。

町の周りには空にまで届いているであろう壁が築かれている。もちろん「壁に扉が！」なんて事はなくただ壁が広がっているだけだ。

さて、“港町”というからには一応港がある。

港は町の中心に湖に近い形で広がっている。

港の近くにはたくさんのお店などが並んでいるが、その中で一際を惹くの周りより一回りほどおおきな建物だろう。

建物の屋根には看板立てかけられこう書かれていた。

「Mazzo Di Fiori - マッツォ デイ フィオーレ -  
」と…。

いつものことだから…

「だ〜もう無理だ!! やつてられっかこんな事!!」  
叫ぶ1人の少年の声。

「は〜い、裂う〜。叫んでる暇があるのなら手を動かすう」

「…お〜い、椿?」

「は〜い、ギルドのマスター椿よ?」

「俺にはどうもお前の手が動いてないように見えるんだが…?」

裂が精一杯の皮肉をこめて言う。

「ええ〜? そうかしらあ?」

満面の笑みでとぼける椿。

「椿、これ終わったよ。次はどれをやればいいんだい?」

「いつもごめんね〜、水墨う」

「いつもの事だから気にしないで」

裂を無視して会話をする椿と水墨と椿に呼ばれている青年。

「それにしても…」

1拍ほどの間。そして

「山、山、山!! 何処を見ても書類の山じゃねえか!!」

裂のわめき声がギルドの中にこだまする。

「本当に…困ったものねえ」

ギルドのマスターであるはずの椿は完全に他人事のように言っている。

そんな後ろでは、なにやら黒いオーラを放つ少年がいた。

「裂ー!! お前という奴は…何度言えば理解するんだー!!」

「うつせえー!! 耳元でうるせえんだよ、この“インテリ眼鏡”が  
!..」

ピクっ、と少年の耳が反応した。

「イ、“インテリ眼鏡”だと!? 俺が“インテリ眼鏡”ならお前は

“運動バカ”だ!! “運動バカ”

「2回も言うなよこの“インテリ眼鏡”!!!」

“運動バカ”!!!」

(うわぁ…低レベル…)

「こんのやるー…調子に乗りやがって…」

と裂が言い終わるかそれよりも速く裂の周りに赤と橙の中間の色の光の粉が集まりはじめた。

「上等だ。そっちがその気ならこっちだって…」

眼鏡をもとの位置に戻すと、少年の方にも灰色の空気が流れはじめた。

『うおー!!!』

2人の雄たけびとともにふた2人の周りにあつたモノがそれぞれ弾け、お互いに向かつて走り出した。

が、2人はぶつかる前に、それぞれが頭をはたかれ床で顔面を強打した。

『痛えなあ!!何すんだよ、ボケ!!!』

2人が顔を上げながら同時に言った。

その顔を上げて見た先には、満面の笑みの椿と、横で頭を抱える水墨がいた。

そんな二人の手にはそれぞれ、ハリセンとスリッパが握られていた。

「その台詞は誰に向かって言ってるのかしらねえ…裂、尋？」

椿が笑みを崩さずに首をかしげながら言った。

顔が青ざめていく裂と尋。

「…普通に考えれば僕らに向けて言ったんじゃないかな？」

2人がにこやかに会話をしている会話の対象にされている裂と尋は肩を寄せ合い、激しく、今にもガタガタと音が聞こえそうなくらいに震えていた。

《ヤ、ヤバイ…!!!絶対ニコロサレル!!!》

2人とも心の中でそう思っていた。

## 脱兎のごとく

パシッパシッ

ハリセンで威嚇じみたことをする椿。

（ああ…楽しい…楽しすぎるわ）

「そんなにガタガタ震えなくても大丈夫よ？」

《何が大丈夫なんだ！？しかも、なぜに疑問系！？自分でも大丈夫か分からないってことなのか！？》

何かを感じ取っただろう、尋が裂に耳元で話しかけた。

「おい、裂逃げるぞ」

「え？」

死にたいならそこにいろ、と言い残しギルドの外へ脱兎のごとく走り去っていった。

「マスター、報告書には死亡者一名、でいいですか？」

一人の少女が紙とペンを持ち、なにやら書きながら椿に問う。

「ええ、お願い。死亡原因は、そうねえ…窒息死にでもしといて頂戴。頼んだわよ、織千代」

「はい」

2人の会話を聞きようやく状況を理解した裂。不気味な笑みで徐々に近寄ってくる椿。

「あら？どうしたの裂？そんなに後ずさって」

ぎこちない笑みを浮かべる裂。

「は、はは…は…」

「大丈夫、怖くないわよお？」

（いやその疑問系が怖いんだって！！）

水墨に視線を送る裂。

（助けてくれ！水墨！椿を止められるのはお前しかいない！）  
が、水墨はそんな裂に気付くと視線を逸らしてしまった。

（ゴメン裂…こんな椿を止めるのは僕でも無理なんだ！！）

「うん？どうかしたの裂？」

裂の視線が自分にきていないことを不審に思ったのか問う椿。

「べ、別に、な、何もないぜ！！」

不自然な笑みを浮かべる裂。

と、次の瞬間。

ギルドの中が一瞬にして氷り付けになり、風が吹き荒れた。

「あら、おかえりなさい。今回は帰ってくるのが遅かったわね、亜乃、亜斗」

「ああ」

興味なさげに返事を返す二人組み。

「報告書は書いてある…今日はこれで帰る」

「そ、じゃあまた明日」

「ああ」

と、次の瞬間には二匹の蝶しかその場にはいなかった。

改めて。

「さ、気を取り直していくわよ〜裂!」  
なにやらテンションがあがった様子の椿。

パシッ、パシッ

(ま、マズイ…逃げないと本当に織千代の書いた報告書通りになっちまう!)

状況が悪化していく一方で裂は良いことを思いついた。

「な、なあ椿」

笑顔で裂を見る椿。

「は〜い?」

「よ、よかったら…お前さえよかったら…」

「?」

(何面白いこと言ってくれるのかしら)

心の中でルンルンな椿。もちろん、顔にその心の中は反映済みだ。そして、未だにハリセンは健在だ。

「おつかいに行こうか?」

「グフっ!!」

横にいた水墨が思わず吹いた。

織千代は顔を背けていて分からないが、体が小刻みに震えていることからおそらくは笑いを押さえ込もうとしているのだろう。

「いいけど、一人で大丈夫? 裂は方向音痴だったと思うのだけど…?」

「そこは問題ない、尋を連れて行く」

「なっ!!」

裂が見た先にはいつ戻ってきていたのかは分からないが、尋がいた。

「なんで俺がお前と…」

目で何かを言う裂。

(椿の手をちゃんとよく見る…?)

二人の間で行われるアイコンタクト。

尋は椿の手に握られているハリセンに気がついた。

(げっ、まだ持っていたのか！)

「…分かった。で、何をすればいいんだ？」

渋々頷く尋。

「うーん……………あッ！」

何かひらめいた様子の椿。

《うわぁ…絶対何かとんでもないことを思いついたな》

二人の心境など知るはずもなく。

「二人には、この『ガルバンドン』の討伐依頼に行ってほしいの」

できるわよね？満面の笑みの椿。

「いやいやいや、『ガルバンドン』といえば大陸で一番でかい野獣

だぜ？俺たちには無理があるんじゃない？」

「そう……………無理なら仕方ない、二人には」

『よろこんで、行ってきます！！』

そういうと、猛スピードで二人はギルドを出て行った。

「…大丈夫なの？」

不安そうに尋ねる織千代。

「ええ、きつと」

微笑み返す椿。

「さ、早くこの書類の山を片付けてしましましょう」

そういうと椿は、山の一つを崩しにかかった。

## ガルバンドン

「とは言つたものの…」

「俺たちにはきついだらうな…」

二人は今、砂漠の中を歩いている。

「俺は戦闘向きのアザルトだが、お前は違うからな…」

「…ああ。戦闘も不可能ではないがな…。しかし、ガルバンドンにお前のアザルトじゃ相性が悪いからな…」

(アザルト) それは旧ロシア語で、情熱、熱中、熱狂…  
e t c.

平行世界と交わることで生まれた異能の名称だ。

アザルトには複数の種類があるといわれており、詳しいことは何も分かっていない。

今必死に各国の研究者たちが調べているところだ。

そんなアザルトを使い、人助けをすることがギルド“M a z z o

D i F i o r i - マッツォ デイ フィオーレ”

の主な仕事だ。

「とりあえず、依頼主のところへ行ってみるか…」

「無難だな」

二人は頷きあい、依頼主の住む町へと砂漠の道なき道を歩きはじめた。

「や、やっと町だ…」

「み、水は、何処だ…」

死にかけの二人が依頼主の住んでいる町についたころにはすでに日が傾き始めていた。

「と、とりあえず宿をとろう」

「ああ、あと椿に報告を…しよう…」

怪しい足取りで宿にたどり着いた二人は死ぬようにベッドに倒れこんだ。

「ガルバンドンはあの砂漠の中にいるんだよな…」

あそこにはもう行きたくない、と裂の顔には書かれていた。

「ああ…椿は何をを考えているんだ…」

（もともと戦闘に不向きな俺と、ガルバンドンに極端に相性の悪い裂…どう考えても無理だ）

次の日

二人は今とある屋敷の中にいた。

二人の前には堅そうな一人の男が座っている。言うまでもないが、今回の「ガルバンドン討伐」の依頼主だ。

「場所はこここの砂漠でいいな？」

「ああ、だがこの前はこここの湖付近にも出た」

（…湖…確かガルバンドンの生息地は…）

「それは何時のことですか？」

「一昨日前だったと思う」

「そうですか…」

考え込む尋。

（ガルバンドンの生息地域は砂漠地帯のみだったはず…湖付近のような湿った場所や物を嫌う特徴で有名なガルバンドンが湖付近に出没…解せないな）

「…この討伐依頼なんか裏があるにおいがする…」

裂の呟きに尋は頷いた。

「馬鹿にしては感がいいな…馬鹿だからか…」

「馬鹿じゃねえよ！」

突っかかってくる裂をなだめ、話を戻す尋。

「ガルバンドンは砂漠に生息する生き物だ。それが湖付近に出るこ

とはまずない」

同じことを思っていたのだろう、裂が頷く。

「ああ、湿ったものを嫌う特徴あるやつだからな」

「そうなるよ、依頼主が何を見てガルバンドンだと思ったのか…ここが問題になってくる」

考え込む二人。

「だが、湖付近に生息する生き物にガルバンドンに似た奴がいるなにか聞いたことねえ」

頷く尋。

「だとすると、残ってるのは『依頼主が黒』説と『何か別の新種の生物』説か…一番可能性としては低いけど、何らかの組織が関与しているかのどれかだな」

うなる尋と裂。

「椿に相談するか…」

しぶしぶ切り出した裂。

意外にも頷く尋。

「それが一番無難だろう。…おそらく椿は何らかの方法を使ってこの状況が分かっていたのだろう」

（なる…ってやっぱり分かかって来させたのかよ…はああ…）

「だから俺らにこの仕事をさせた…そうと決まれば宿に戻って椿に連絡だな！」

「ああ、椿からもつと情報を聞き出す必要がある」

二人はそう決めると宿へと急いで帰っていった。

## 知ってること

『あははっ、さっすがあ』  
あっけらかんと笑い飛ばす椿。

二人は今「コンパクトコミュニケーションシステム」略してCCS  
を使って、遠い町にいる椿と話している。

CCSは過去の携帯と違い、小さなパソコンの形状をとっている。  
また、CCSは携帯や、パソコンでは出来なかつた地質の調査や、  
武装リーダー（武装している者を自分を中心に半径一キロ以内に入  
ると表示する機能）…コンパクトだが、他にも高性能な能力を秘め  
ている。

「笑い事じゃねえんだよ！」  
宿の部屋で叫ぶ裂。

「落ち着け、裂。 結界が壊れるだろ！」

先程から必死に結界をはる尋。

理由は第三者組織がいた場合、この会話を盗聴されるのを防ぐため  
だ。

「椿、手短に頼む」

尋は短く告げると、結界の維持に意識をもつていった。

『そうね…まず、第三者組織の介入ははつきり言ってあたりね。 織  
千代たちに調べてもらった結果、ユニオンの研究者たちがガルバン  
ドンのロボ…を作ってた履歴があつたらしいのよ』

「…!!」「」

驚きを隠せない様子の二人。

（第三者組織はユニオン！？）

ユニオン…非アザルト使用者を護るために発足された組織。

世界各国のアザルトを集め、メセボに詰め込んだのもこのユニオンだ。

正式名称は、世界平和共存連合。  
名前とは裏腹に、人種差別を軽んじる組織として“こっち”の世界では有名である。

「ユニオンが介入してくるとなると厄介だな…。奴らは俺らアザルティストを研究対象の一部と公式発表をしてるからな…」  
考え込む裂。

『事実、すでに何人かのギルドのメンバーが、ユニオンに実験体として連れて行かれてるわ』

（全員奪い返しに行つたがな…）  
結界に集中しているためあまり話せない尋は心の中でそうつぶやいた。

永い永い沈黙…。

『おそらく、その依頼主も黒だろう』

向こう側で誰かが会話に割り込んできた。

声からして男だろうが、顔が分からない状態ではうかつな発言は命取りになる、そう思った裂は黙って相手の話の続きに耳を傾けた。

『ユニオンが金を払い、雇つたのだろう』

（なるほど…それなら辻褃が合う）

「だとすると、俺らにはどうすることも出来ないんじゃないかねえのか？」  
裂が口にした疑問に隣で頷いた尋。

『いや、手はあるがお前はそれで満足なのか、裂？』

相手の指摘に裂は言葉を詰まらせた。

相手の言うとおり満足ではない。なにしろ何にもしてないのだから。そしてなにより裂にとって、討伐依頼ほど楽しい依頼はない。だから、正直なところ満足ではない。

『そこで、だ。お前らはそのユニオンの機械で出来たガルバンドンを破壊してこい』

CCSの向こうからの言葉に裂は思わず笑みを浮かべた。

「いいのか？俺の破壊は、木端微塵こしほみじんになっちまうぞ？知ってるだろ、亜乃？」

『やっと誰だか分かったようだな…』

「うっせい、ほっとけ」

そっぽを向く裂。

『むしろその方がいい。戦闘データも、何も残らないように始末してこい』

（亜乃：裂の得意なことをよく分かっている…そして、それをうまく利用している…）

心の中でひそかに感心する尋。

「よっしゃ、跡形も無く破壊してくるぜ！」

ああ、という亜乃の返事と共に会話が終了した。

ふう

ため息をつく尋。

「よし、尋。早速明日その湖とやらに行って、そいつを破壊するぞ！」

「ああ」

力強く尋は頷き、二人は明日の戦闘の用意を始めた。

「よかったの？本当に木端微塵にするわよ、裂」  
隣にいる亜乃に聞く椿。

「ああ、これで未来は確実に変わるだろう」

「？」

隣でうなる椿。

話は終わりだ、というと椿の隣には黒に青紫の蝶以外に誰もいなか

つ  
た  
…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3765x/>

---

ギルド“Mazzo Di Fiori - マッツォ ディ フィオーレ”～裂と尋の冒険記～

2011年11月5日13時20分発行